



資料 1 主体的・対話的で深い学び

第3 指導計画の作成と内容の取扱い 1の(1)

(1) 単元など内容や時間のまとまりを見通して、その中で育む**資質・能力の育成**に向けて、児童の主体的・対話的で深い学びの実現を図るようにすること。その際、体育や保健の見方・考え方を働かせながら、運動や健康についての自己の課題を見付け、その解決のための活動を選んだり工夫したりする活動の充実を図ること。また、運動の楽しさや喜びを味わったり、健康の大切さを実感したりすることができるよう留意すること。

資料 2 主体的な学びのための授業改善の視点

- ①児童生徒の**興味や関心**を喚起しているか
- ②学習の**見通し**を明示しているか
- ③本時または単元の**課題と課題解決のための活動**を明確にしているか
- ④毎時間の**振り返り**を大切にしているか
- ⑤本時または単元の学習の**成果**を確認しているか

資料 3 主体的な学びを促すためのチェックリスト

- 導入の工夫と雰囲気づくり
- 活動の見え化
- 適した課題の提示
- 場や用具、ルールなどの工夫
- 適切な言葉がけ
- 苦手な子、意欲的でない子への配慮
- 教える・委ねるのバランス

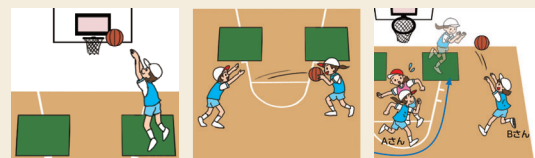
Check!

子どもの主体性を引き出す「必要感」について

子どもたちに、以下のように**必要感**をうまくもたせるには
 ・なぜこの運動をしているのか
 ・どうしたら楽しめるのか
 ・どうしたらうまくなるのか

▶自分と運動との多様な楽しみ方を追究する。

[バスケットボールを例に]



シュートをする。 パスのやり取り。 戦術を考える。
 光文書院「体育の学習5年」P.70-71より

主体的な学びの視点からの授業改善とは？

高田 まず、「資質・能力の育成に向けて、児童の主体的・対話的で深い学びの実現を図るようにすること」と新学習指導要領では規定しています。つまり、主体的・対話的で深い学びの実現が目的ではなく、このキーワードで授業改善を進めることによって、より児童の資質・能力の育成を図ることが求められているということです。(資料 1)

今井 このキーワードの中でも、私は主体的な学びの部分がポイントだと考えているのですが、主体的な学びの実現に向けて、どのような授業改善の視点がありますか。

高田 まず、授業改善の視点として、興味や関心を喚起しているかということがあるのではないのでしょうか。興味や関心を掻き立てるような教材や教具、場や用具、ルールの工夫、そういったもので子どもたちの主体性を引き出せるのではないかと思います。

2つ目は見通しを明示するというです。見通しがもてれば、次に何をすればよいかという意識につながります。

3つ目は、課題とその解決のための活動を明確にするということです。それが分かれば、先生に聞くまでもなく自分で取り組む姿が期待されます。ですから授業改善としては、課題が明確であったかどうか、課題を解決するための活動が十分に保障されていたかどうかという視点で授業を改善していただけたらよいと思います。

4つ目と5つ目は、振り返りと成果の確認です。この2つは、本時というよりも次時への主体的な学びにつながると思います。1時間の授業を漠然とやって、「今日は楽しかったね。」で終わるのではなく、学習の課題の解決に向けて自分がどれくらいできたのかできなかったのかを十分に振り返り、「次の時間はこうしてみようね。」と授業を終えたなら、主体的な学びが次の時間に連続していくのだと思います。(資料 2 3)

対話的な学びの視点からの授業改善とは？

今井 「対話」という言葉をそのまま捉えて、授業過程に強引に**・作戦タイムを設けて話し合わせなければいけない。**

・学習の流れで振り返りの時間をつくらなければいけない。

として、話し合い場面を入れる場合がありますが……。

高田 対話的な学びのための授業改善の視点として、3つあげましたのでご確認ください。(資料 4)

まとめると、チェックリスト1項目にもあげましたが、やはり「目」なのです。見るということです。教え合うにも励まし合うにもやはり見ていないとできません。他人事を自分事にする事で対話はどんどん生まれてきて活性化していきます。

それから教師が言語環境をつくれますから、教師の方でどんどん言葉をかけることが大事だと思います。先生の使う言葉が、子ども同士の対話でもどんどん使われるようになります。

子どもの対話のボキャブラリーを、先生がどんどん示していくことを特に若い先生方にはお願いしたいと思います。

また、課題を具体化すれば、分かりやすいので対話もしやすいということです。それから、体育ならではの対話であるボディランゲージですね。オノマトペもそうです。もっと“シュッと”やろうとか、“ピタッと”止まるようにとかいう擬音語や擬態語も用いながら、いろいろな表現の仕方をするのが体育の授業では許されていて、そういう表現によって子どもたちの対話が飛び交っていくことが期待できると思います。

さらに、五感を働かせて第六感を引き出すということです。体育は身体活動の中で五感を働かせます。見るだけでなく、触る、もしかしたら匂いとかもあるかもしれません。いろいろな場の匂いなどそういったものも働かせて、こつとかうまくできるポイント、タイミングといった第六感に近いような感覚的なものを引き出していくことが対話的な学びには重要であると思います。(資料 5)

深い学びの視点からの授業改善とは？

今井 主体的や対話的は、言葉からも理解していくことができそうなのですが、深い学びとは、具体的にどのような子どもの姿なのか理解しづらいと思います。ぜひ、具体的に解説してください。

高田 先生方も、“子どもたちがすごく腑に落ちているな”とか“子どもたちが没頭しているな”と感じるときがあると思います。それはまさに子どもたちが深い学びをしていると捉えてよいと思います。スポーツ用語ではよく“フロー”といいますが、そのフローの状態のことです。

深い学びというキーワードで授業改善を考えるときに、1つ目に言いたいのは、ただ易しい課題を繰り返しているだけだと子どもたちは次第に飽きてきます。そうではなくて、試行錯誤を促しているかという視点です。子どもたちはいろいろな方法を試しながら、“あっ、これだ!”と気づいたときに、それは深い学びの一つの場面なのではないかと思います。ですから多様な課題や活動をしっかりと保障できるようにすることが深い学びを生むためには重要な授業改善の視点ではないかと思います。

2つ目は、子どもたちの思考に深まりが見られているかという視点で授業を考えていただきたい。何となく課題を出して活動を変えていくだけでは深い学びにはならないので、やはり子どもたちにこだわりが出てきて、自分なりに思考を深めていく活動があったときに、深い学びが現われるのではないかと思います。

3つ目は、見方・考え方と関わってくると思います。体育や保健の見方・考え方を働かせているかどうかという視点で授業を改善していただくと深い学びと関連づくかと思えます。(資料 6 7)



資料 4 対話的な学びのための授業改善の視点

- ①児童生徒一人一人の**表現力**を伸ばしているか
- ②課題解決の場面などで**必然性**のある対話が展開されているか
- ③児童生徒の**新たな気付き**や動機付けにつながっているか

資料 5 対話的な学びを促すためのチェックリスト

- 見eye、教えeye、励ましeye、助けeye、褒めeye
 (「目は口ほどにものをいう」)
- 言語環境づくり (子供の対話は教師から)
- 課題の具体化
- ボディ・ランゲージ
- 五感を働かせ、第六感を引き出す

Check!

資料 6 深い学びのための授業改善の視点

- ①易しい課題に終始せず**試行錯誤**を促しているか
- ②課題の解決に向けた**思考**に深まりが見られているか
- ③**体育や保健の見方・考え方**を働かせているか

資料 7 深い学びを促すためのチェックリスト

- こだわりを大切に
 (あえて、揺さぶりも必要)
- 腑に落ちている瞬間を見逃さない
 (子供は声や表情、動きなどで合図する)
- 多様な「できる」を認め、教科としての魅力を
 実感できるように
 (体育 楽しく 遅しく)

Check!

体育や保健の「見方・考え方」とは？

“する”ことだけでなく、“**見る**”こと“**支える**”こと“**知る**”ことという多様な関わり方や楽しみ方があること



楽しかったり、存在感を感じられたり、役に立ったなと思える授業に!

光文書院「体育の学習6年」P.3より